金閣寺

三島由紀夫

新潮社版

（新宿・加藤製本）
亂丁落丁のものは本社又はお買求
めの書店にてお取替へいたします

Printed in Japan

定價 280圓
地方賣價 290圓

金閣寺

昭和三十一年十月三十日 初版
昭和三十一年十一月二十日 再版

著者 三島由紀夫
發行者 佐藤亮一
東京都新宿區矢來町七一
印刷者 山田一雄
東京都青梅市根ケ布二六五
印刷所 精興社
東京都青梅市根ケ布二六五
發行所 株式會社 新潮社
東京都新宿區矢來町七一
電話東京三四局七二一一八
振替東京八〇八番

金閣寺

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

第一章

幼時から父は、私によく、金閣のことを語つた。

私の生れたのは、舞鶴から東北の、日本海へ突き出たうらさびしい岬である。父の故郷はそこではなく、舞鶴東郊の志樂である。懇望されて、僧籍に入り、邊鄙な岬の寺の住職になり、その地で妻をもらつて、私といふ子を設けた。

成生岬の寺の近くには、適當な中學校がなかつた。やがて私は父母の膝下を離れ、父の故郷の叔父の家に預けられ、そこから東舞鶴中學校へ徒歩で通つた。

父の故郷は、光りのおびただしい土地であつた。しかし一年のうち、十一月十二月のころには、たとへ雲一つないやうに見える快晴の日にも、一日に四五へんも時雨が渡つた。私の變りやすい心情は、この土地で養はれたものではないかと思はれる。

五月の夕方など、學校からかへつて、叔父の家の二階の勉強部屋から、むかうの小山を見る。若葉の山腹が西日を受けて、野の只中に、金屏風を建てたやうに見える。それを見ると私は、金閣を想像した。

寫眞や教科書で、現實の金閣をたびたび見ながら、私の心の中では、父の語つた金閣の幻のはう

が勝を制した。父は決して現實の金閣が、金色にかがやいてゐるなどと語らなかつた筈だが、父によれば、金閣ほど美しいものは地上になく、又金閣といふその字面、その音韻から、私の心が描きだした金閣は、途方もないものであつた。

遠い田の面が日にきらめいてゐるのを見たりすれば、それを見えざる金閣の投影だと思つた。福井縣とこちら京都府の國堺をなす吉坂峠は、丁度眞東に當つてゐる。その峠のあたりから日が昇る。現實の京都とは反對の方角であるのに、私は山あひの朝陽の中から、金閣が朝空へ聳えてゐるのを見た。

かういふ風に、金閣はいたるところに現はれ、しかもそれが現實に見えない點では、この土地における海とよく似てゐた。舞鶴灣は志樂村の西方一里半に位置してゐたが、海は山に遮ぎられて見えなかつた。しかしこの土地には、いつも海の豫感のやうなものが漂つてゐた。風にも時折海の匂ひが嗅がれ、海が時化ると、澤山の鷗がのがれてきて、そこらの田に下りた。

體も弱く、駈足をしても鐵棒をやつても人に負ける上に、生來の吃りが、ますます私を引込思案にした。そしてみんなが、私をお寺の子だと知つてゐた。惡童たちは、吃りの坊主が吃りながらお經を讀む眞似をしてからかつた。講談の中に、吃りの岡つ引の出てくるのがあつて、さういふところをわざと聲を出して、私に讀んできかせたりした。

吃りは、いふまでもなく、私と外界とのあひだに一つの障碍を置いた。最初の音がうまく出ない。その最初の音が、私の內界と外界との間の扉の鍵のやうなものであるのに、鍵がうまくあいたため

しがない。一般の人は、自由に言葉をあやつることによつて、内界と外界との間の戸をあけつぱなしにして、風とほしをよくしておくことができるのに、私にはそれがどうしてもできない。鍵が錆びついてしまつてゐるのである。

吃りが、最初の音を發するために焦りにあせつてゐるあひだ、彼は内界の濃密な靄から身を引き離さうとじたばたしてゐる小鳥にも似てゐる。やつと身を引き離したときには、もう遲い。なるほど外界の現實は、私がじたばたしてゐるあひだ、手を休めて待つてゐてくれるやうに思はれる場合もある。しかし待つてゐてくれる現實はもう新鮮な現實ではない。私が手間をかけてやつと外界に達してみても、いつもそこには、瞬間に變色し、ずれてしまつた、……さうしてそれだけが私にふさはしく思はれる、鮮度の落ちた現實、半ば腐臭を放つ現實が、横たはつてゐるばかりであつた。

かういふ少年は、たやすく想像されるやうに、二種類の相反した權力意志を抱くやうになる。私は歴史における暴君の記述が好きであつた。吃りで、無口な暴君で私があれば、家來どもは私の顔色をうかがつて、ひねもすおびえて暮すことになるであらう。私は明確な、辷りのよい言葉で、私の殘虐を正當化する必要なんかないのだ。私の無言だけが、あらゆる殘虐を正當化するのだ。かうして日頃私をさげすむ教師や學友を、片つぱしから處刑する空想をたのしむ一方、私はまた内面世界の王者、靜かな諦觀にみちた大藝術家になる空想をもたのしんだ。外見こそ貧しかつたが、私の内界は誰よりも、かうして富んだ。何か拭ひがたい負け目を持つた少年が、自分はひそかに選ばれた者だ、と考へるのは、當然ではあるまいか。この世のどこかに、まだ私自身の知らない使命が私を待つてゐるやうな氣がしてゐた。

……こんな一挿話が思ひ出される。

東舞鶴中學校は、ひろいグラウンドを控へ、のびやかな山々にかこまれた、新式の明るい校舍であつた。

五月のある日、中學の先輩の、舞鶴海軍機關學校の一生徒が、休暇をもらつて、母校へあそびに來た。

彼はよく日に灼け、目深にかぶつた制帽の庇から秀でた鼻梁をのぞかせ、頭から爪先まで、若い英雄そのものであつた。後輩たちを前にして、つらい規律づくめの生活を語つた。しかもそのみじめな筈の生活を、豪奢な、贅澤づくめの生活を語るやうな口調で語つたのである。一擧手一投足が誇りにみちあふれ、そんな若さで、自分の謙讓さの重みをちやんと知つてゐた。彼はその制服の蛇腹の胸を、海風を切つて進む船首像の胸のやうに張つてゐた。

彼はグラウンドへ下りる二三段の大谷石の石段に腰を下ろしてゐた。そのまはりには、話に聽き惚れてゐる四五人の後輩がをり、五月の花々、チューリップ、スキートピイ、アネモネ、雛罌粟、などが斜面の花圃に咲きそろつてゐた。そして頭上には、朴の木が、白いゆたかな大輪の花をつけてゐた。

話者と聽手たちは、何かの記念像のやうに動かなかつた。私はといへば、二米ほどの距離を置いて、グラウンドのベンチに一人で腰掛けてゐた。これが私の禮儀なのだ。五月の花々や、誇りにみちた制服や、明るい笑ひ聲などに對する私の禮儀なのだ。

さて、若い英雄は、その崇拜者たちよりも、よけい私のはうを氣にしてゐた。私だけが威風になびかぬやうに見え、さう思ふことが彼の誇りを傷つけた。彼は私の名をみんなにきいた。それから、

「おい、溝口」

と、初對面の私に呼びかけた。私はだまつたまま、まじまじと彼を見つめた。私に向けられた彼の笑ひには、權力者の媚びに似たものがあつた。

「何とか返事せんのか。唖か、貴樣は」

「ど、ど、ど、吃りなんです」

と崇拜者の一人が私の代りに答へ、みんなが身を撚つて笑つた。嘲笑といふものは何と眩しいものだらう。私には、同級の少年たちの、少年期特有の殘酷な笑ひが、光りのはじける葉叢のやうに、燦然として見えるのである。

「何だ、吃りか。貴樣も海機へ入らんか。吃りなんか、一日で叩き直してやるぞ」

私はどうしてだか、咄嗟に明瞭な返事をした。言葉はすらすらと流れ、意志とかかはりなく、あつといふ間に出た。

「入りません。僕は坊主になるんです」

皆はしんとした。若い英雄はうつむいて、そこらの草の莖を摘んで、口にくはへた。

「ふうん、そんならあと何年かで、俺も貴樣の厄介になるわけだな」

その年はすでに太平洋戰爭がはじまつてゐた。

……このとき私に、たしかに一つの自覺が生じたのである。暗い世界に大手をひろげて待つてゐること。やがては、五月の花も、制服も、意地悪な級友たちも、私のひろげてゐる手の中へ入つてくること。自分が世界を、底邊で引きしぼつて、つかまへてゐるといふ自覺を持つこと。……しかしかういふ自覺は、少年の誇りとなるには重すぎた。

誇りはもつと輕く、明るく、よく目に見え、燦然としてゐなければならなかつた。目に見えるものがほしい。誰の目にも見えて、それが私の誇りとなるやうなものがほしい。例へば、彼の腰に吊つてゐる短劍は正にさういふものだ。

中學生みんなが憧れてゐる短劍は、實に美しい裝飾だつた。海兵の生徒はその短劍でこつそり鉛筆を削るなんぞと言はれてゐたが、さういふ莊嚴な象徵をわざと日常些末の用途に使ふとは、何と伊達なことだらう。

たまたま、機關學校の制服は、脫ぎすてられて、白いペンキ塗りの柵にかけられてゐた。ズボンも、白い下著のシャツも。……それらは花々の眞近で、汗ばんだ若者の肌の匂ひを放つてゐた。蜜蜂がまちがへて、この白くかがやいてゐるシャツの花に羽根を休めた。金モールに飾られた制帽は、柵のひとつに、彼の頭にあつたと同じやうに、正しく、目深に、かかつてゐた。彼は後輩たちに挑まれて、裏の土俵へ、角力をしに行つたのである。

脫ぎすてられたそれらのものは、譽れの墓地のやうな印象を與へた。五月のおびただしい花々が、この感じを强めた。わけても、庇を漆黑に反射させてゐる制帽や、そのかたはらに掛けられた帶革と短劍は、彼の肉體から切り離されて、却つて抒情的な美しさを放ち、それ自體が思ひ出と同じほ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ど完全で……、つまり若い英雄の遺品といふ風に見えたのである。

私はあたりに人氣のないのをたしかめた。角力場のはうで喚聲が起つた。私はポケットから、錆びついた鉛筆削りのナイフをとり出し、忍び寄つて、その美しい短劍の黑い鞘の裏側に、二三條のみにくい切り傷を彫り込んだ。……

……右のやうな記述から、私を詩人肌の少年だと速斷する人もゐるだらう。しかし今日まで、詩はおろか、手記のやうなものさへ書いたことがない。人に劣つてゐる能力を、他の能力で補塡して、それで以て人に拔きん出ようなどといふ衝動が、私には缺けてゐたのである。別の言ひ方をすれば、私は、藝術家たるには傲慢すぎた。暴君や大藝術家たらんとする夢は夢のままで、實際に著手して、何かをやり遂げようといふ氣持がまるでなかつた。

人に理解されないといふことが唯一の矜りになつてゐたから、ものごとを理解させようとする、表現の衝動に見舞はれなかつた。人の目に見えるやうなものは、自分には宿命的に與へられないのだと思つた。孤獨はどんどん肥つた、まるで豚のやうに。

突然私の回想は、われわれの村で起つた悲劇的な事件に行き當る。この事件には實際は何一つ與つてゐる筈もない私であるのに、それでもなほ、私が關與し、參加したといふ確かな感じが消えないのである。

私はその事件を通じて、一擧にあらゆるものに直面した。人生に、官能に、裏切りに、憎しみと愛に、あらゆるものに。さうしてその中にひそんでゐる崇高な要素を、私の記憶は、好んで否定し、

看過した。

叔父の家から二軒へだてた家に、美しい娘がゐた。有爲子（うるこ）といふ名である。目が大きく澄んでゐる。家が物持のせゐもあるが、權柄（けんぺい）づくな態度をとる。みんなにちやほやされるにもかかはらず、一人ぼつちで、何を考へてゐるのかわからないところがあつた。嫉み深い女は、有爲子がおそらくまだ處女であるのに、ああいふ人相こそ石女（うまずめ）の相だなどと噂した。

有爲子は女學校を出たばかりで、舞鶴海軍病院の特志看護婦になつた。病院へは自轉車で通勤できる距離である。しかし朝の出勤は夜のしらじら明けに家を出るので、私たちの登校時間よりも二時間あまり早い。

ある晩、有爲子の體を思つて、暗鬱な空想に耽つて、ろくに眠ることのできなかつた私は、暗いうちから床を脱け出し、運動靴を穿いて、夏の曉闇の戸外へ出た。

有爲子の體を思つたのは、その晩がはじめてではない。折にふれて考へてゐたことが、だんだんに固著して、あたかもさういふ思念の塊のやうに、有爲子の體は、白い、彈力のある、ほの暗い影にひたされた、匂ひのある一つの肉の形で凝結して來たのである。私はそれに觸れるときの自分の指の熱さを思つた。またその指にさからつてくる彈力や、花粉のやうな匂ひを思つた。

私は曉闇の道をまつすぐに走つた。石も私の足をつまづかせず、闇が私の前に自在に道をひらいた。

そこのところで道がひらけ、志樂村字（あざ）安岡の部落の外れになる。そこに一本の大きな欅がある。

欅の幹は朝露に濡れてゐる。私は根方に身を隠し、部落のはうから有爲子の自轉車が來るのを待つた。

私は待つて、何をしようとしたのでもない。息をはずませて走つてきたのが、欅の木蔭に息を休めてみて、自分がこれから、何をしようとしてゐるのかわからなかつた。しかし私には、外界といふものとあまり無縁に暮して來たために、ひとたび外界へ飛び込めば、すべてが容易になり、可能になるやうな幻想があつた。

藪蚊が私の足を刺した。をちこちに雞鳴が起つた。私は路上を透かし見た。遠く白い仄かなものが立つた。それは曉の色のやうに思はれたが、有爲子だつたのである。

有爲子は自轉車に乘つたらしかつた。前燈が點けられた。自轉車は音もなく辷つてきた。欅のかげから、私は自轉車の前へ走り出た。自轉車は危ふく急停車をした。

そのとき、私は自分が石に化してしまつたのを感じた。意志も欲望もすべてが石化した。外界は、私の內面とは關りなく、再び私のまはりに確乎として存在してゐた。叔父の家を脫け出して、白い運動靴を穿き、曉闇の道をこの欅のかげまで駈けて來た私は、ただ自分の內面を、ひた走りに走つて來たにすぎなかつた。曉闇の中にかすかな輪郭をうかべてゐる村の屋根屋根にも、黑い木立にも、靑葉山の黑い頂きにも、目前の有爲子にさへも、おそろしいほど完全に意味が缺けてゐた。私の關與を待たずに、現實はそこに賦與されてあり、しかも、私が今まで見たこともない重みで、この無意味な大きな眞暗な現實は、私に與へられ、私に迫つてゐた。

言葉がおそらくこの場を救ふ只一つのものだらうと、いつものやうに私は考へてゐた。私特有の

誤解である。行動が必要なときに、いつも私は言葉に氣をとられてゐる。それといふのも、私の口から言葉が出にくいので、それに氣をとられて、行動を忘れてしまふのだ。私には行動といふ光彩陸離たるものは、いつも光彩陸離たる言葉を伴つてゐるやうに思はれるのである。

私は何も見てゐなかつた。しかし思ふに、有爲子は、はじめは怖れながら、私と氣づくと、私の口ばかりを見てゐた。彼女はおそらく、曉闇のなかに、無意味にうごめいてゐる、つまらない暗い小さな穴、野の小動物の巣のやうな汚れた無恰好な小さな穴、すなはち、私の口だけを見てゐた。そして、そこから、外界へ結びつく力が何一つ出て來ないのを確かめて安心したのだ。

「何よ。へんな眞似をして。吃りのくせに」

有爲子は言つたが、この聲には朝風の端正さと爽やかさがあつた。彼女はベルを鳴らし、ペダルにまた足をかけた。石をよけるやうに私をよけて迂回した。人影ひとつないのに、遠く田のむかうまで、走り去る有爲子が、たびたび嘲けつて鳴らしてゐるベルの音を私はきいた。

――その晩、有爲子の告口で、彼女の母が、私の叔父の家へやつて來た。私は日ごろは溫和な叔父からひどく叱責された。私は有爲子を呪ひ、その死をねがふやうになり、數ケ月後には、この呪ひが成就した。爾來私は、人を呪ふといふことに確信を抱いてゐる。

寢ても覺めても、私は有爲子の死をねがつた。私の恥の立會人が、消え去つてくれることをねがつた。證人さへゐなかつたら、地上から恥は根絕されるであらう。他人はみんな證人だ。それなのに、他人がゐなければ、恥といふものは生れて來ない。私は有爲子のおもかげ、曉闇のなかで水のやうに光つて、私の口をじつと見つめてゐた彼女の目の背後に、他人の世界――つまり、われわれ

を決して一人にしておかず、進んでわれわれの共犯となり證人となる他人の世界――を見たのである。他人がみんな滅びなければならぬ。私が本當に太陽へ顔を向けられるためには、世界が滅びなければならぬ。……

例の告口の二ヶ月あと、有爲子は海軍病院の勤めをやめて、家に引きこもつた。村の人たちはいろいろと取沙汰した。さうして秋のをはりに、あの事件が起つた。

……私たちはこの村に海軍の脱走兵が逃げ込んだなどといふことは夢にも知らなかつた。ただ晝ごろ村役場へ憲兵が來た。しかし憲兵の來るのはめづらしくなかつたから、さほどにも思はなかつた。

それは十月末の明るい一日である。私はいつものやうに學校へゆき、夜の勉强をすませて、寢るべき時刻であつた。燈を消さうとして見下ろした村道に、大ぜいの人が、犬の群のやうに息せいて駈ける音がきこえた。私は階下に下りた。玄關口には學友の一人が立つてゐて、起きてきた叔父叔母や私に、目を丸くして叫んだ。

「今、むかうで、有爲子が憲兵につかまつてるぞ。一緒に行かう」

私は下駄をつつかけて駈け出した。月のよい夜で、刈田のそこかしこに稻架(はざ)が鮮明な影を落してゐた。

一むらの木立のかげに、黑い人影が集まつて動いてゐる。黑つぽい洋服を着た有爲子が地面に坐つてゐる。その顔が大そう白い。まはりにゐるのは、四五人の憲兵と、兩親である。憲兵の一人が、

辨當包みのやうなものを差出して、怒鳴つてゐる。父親はあちこちへ顔を動かし、憲兵に詫び言を言つたり、娘を責め立てたりしてゐる。母親はうづくまつて泣いてゐる。

私たちは田を一つ隔てたこちらの畦から眺めてゐた。見物はだんだん增え、お互ひに無言の肩が觸れた。月が絞られたやうに小さく、われわれの頭上にあつた。

學友が私の耳もとで說明した。

辨當包みを持つて家を拔け出して、隣りの部落へ行かうとしてゐた有爲子が、待ち伏せしてゐた憲兵につかまつたこと。その辨當は脫走兵へ屆けるものに相違ないこと。脫走兵と有爲子は海軍病院で親しくなり、そのために姙娠した有爲子が病院を追ひ出されたこと。憲兵は脫走兵の隱れ家を言へと詰問してゐるが、有爲子はそこに坐つたまま一步も動かず、頑なに押し默つてゐること。……

私はといへば、目ばたきもせずに、有爲子の顔ばかりを見つめてゐた。彼女は捕はれの狂女のやうに見えた。月の下に、その顔は動かなかつた。

私は今まで、あれほど拒否にあふれた顔を見たことがない。私は自分の顔を、世界から拒まれた顔だと思つてゐる。しかるに有爲子の顔は世界を拒んでゐた。月の光りはその額や目や鼻筋や頰の上を容赦なく流れてゐたが、不動の顔はただその光りに洗はれてゐた。一寸目を動かし、一寸口を動かせば、彼女が拒まうとしてゐる世界は、それを合圖に、そこから雪崩れ込んで來るだらう。

私は息を詰めてそれに見入つた。歷史はそこで中斷され、未來へ向つても過去へ向つても、何一つ語りかけない顔。さういふふしぎな顔を、われわれは、今伐り倒されたばかりの切株の上に見る

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.